



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	苦悩と信仰：フランクルの意味の理論における実存的決断について
Author(s)	雨宮， 徹
Citation	哲学， 56， 31-43
Issue Date	2024-12-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95645
Type	departmental bulletin paper
File Information	56_t4.pdf



苦悩と信仰——フランクルの意味の理論 における実存的決断について

雨 宮 徹

はじめに

意味を見失って苦しむ患者のための心理療法ロゴセラピーを創始し、またナチスによる強制収容所を体験したオーストリアの精神科医フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) は、人間が内在的世界において問いかけを聞き、それに応答すべく行為をするとき、意味を実現することができると考えている。また一方で、内在的世界を超え、世界全体の意味を信じるとき、人間は超意味の地平に立っているのだと述べ、それを宗教的信仰のあり方であると考えている。フランクルはこの超意味と人間の関係を「守護性」、それを自覚する者を「宗教的人間」と呼び、そうした人々は内在的世界における意味を実現して生きる者よりも一層、苦悩に耐えることができるとしている。

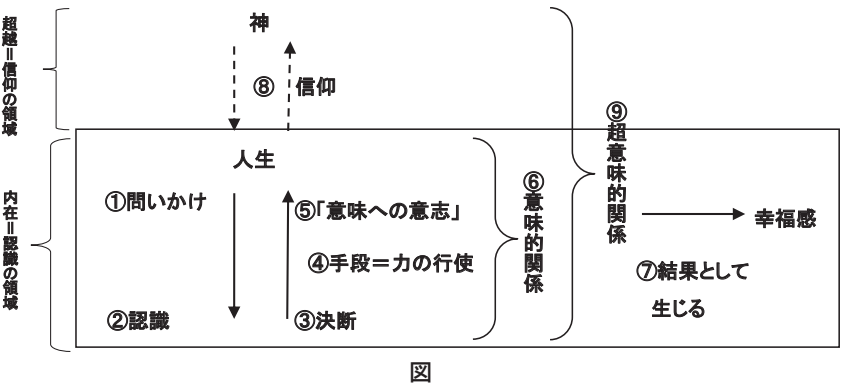
この世界全体が無意味であるか、超意味を持つか、どちらであるかを決定できる論理的な根拠はなく、超意味があると信じるのは実存的な決断なのである、とフランクルは述べる。世界全体の意味についての議論は、一見したところ、認識の限界および論理的矛盾をめぐる問題であるように思われるのだが、フランクルはそこに実存的決断という要素を取り入れ信仰の問題として扱っている。しかし、なぜそれが実存的決断の問題として扱われることになるのか、彼のテキストにおいて必ずしも、明瞭であるとは言えないように思われる。

フランクルは人生の意味についての理論を、強制収容所に入れられる前から既に確立しており、また幼少の頃からユダヤ教の信仰を持っていた。したがっ

て強制収容所での体験だけが彼の思想を形成したというわけではないが、拙論では、そこでの底知れぬ苦悩の体験が世界全体の意味の問題を、論理的矛盾をめぐる問題に留まらず、彼の信仰理解に少なからぬ影響を与えたのではないかという仮説を立て、そうした観点からフランクルのテキストを整合的に読むことができるか、検証していくことを目的とする。

1 内在と超越

フランクルの思想において、人間が人生において見出す意味は、大きく二種類に分けられている。一つは信仰を持たない非宗教の人間が見出す、内在的関係において成立する意味、もう一つは信仰を持つ宗教の人間が見出す、超越者との関係において成立する超意味である。両者の違いを確認するために、以前に拙論¹で用いた図を参照したい。



苦境に立たされ「もはや人生から何も期待できない」(Frankl, 2007, S.155 [2011, 191頁])という仕方で絶望する人間は、生きていることに意味を見出すことができなくなる。こうした絶望状況から抜け、生きている意味を見出し

¹ 雨宮徹「滝沢克己とフランクルー意味と超意味をめぐる」大阪工業大学紀要66-1、2021、23頁。

実現するためには、「人生の意味への問いについてのコペルニクスの転回」(Frankl, 2007, S.107 [2011, 131頁])が行われなければならない、とフランクは述べる。その転回とは、人間が人生に対して何かを期待するという立場から、人生が人間に期待していることを見出し、それに応答するという立場への転回である。このような転回が実現できたとき、人間と、人生で出会う諸々の人格や状況との間に意味的關係が成立する。つまり、自分がその時々に出会う人格や状況が、私になすべきこと、すなわち「課題」(Aufgabe) (Frankl, 1991, S.62 [2002, 89頁])を示し、それに応じて行為することによって、自分の存在と自分を取り巻く人生に意味をもたらすのだ、ということである。典型的にそれは、「何らかの仕方で世界を形成すること」により実現される「創造価値」(schöpferischen Werte)、「私たちの内面が存在の美や真理によって貫かれること」により実現される「体験価値」(Erlebniswerte)、「存在に耐えること、運命に耐えること」によって実現する「態度価値」(Einstellungswerte)として体験されると述べられる。後に詳しく論じるが、態度価値は道徳的な高みという点で、創造価値や体験価値を凌ぐものとして位置付けられている。(Frankl, 1991, S.202-3 [2004, 119-20頁])

それとは異なるものとして、超越的・宗教的立場において成立する意味がある、とフランクは考えている。内在的・非宗教的立場においては、なすべきことを問いかけてくる具体的な人格や状況を、自己は認識することができる。それに対して、超越的・宗教的立場においては、自己が直接認識することができないものとしての超越者との間に、信じるという仕方で関係を成立させるのである。このときに成立するものは、意味ではなく、意味を超えたもの、すなわち「超意味」(Über-sinn) (Frankl, 1946, S.63 [1994, 112頁])と呼ばれる。超意味的關係にあるとき、内在的・非宗教的立場においては「課題」(Aufgabe)と受け止められていたものが、超越者からの「委託」(Auftrag) (Frankl, 1991, S.62 [2002, 89頁])として受け止められるのだとされる。「少なくとも個人的な現存在の決定的瞬間においてつねに繰り返し明らかになることは、運命的な限界状況に対しては宗教的な態度を取ること以上に、人間がその状況

に打ち勝つことを可能にさせるものはほとんど他にない」(Frankl, 1991, S.74 [2002, 106頁])と言われ、そしてこのように超越者を信じる時、内在的・非宗教的立場にある者よりも一層、苦悩に耐えることができるのだとされるのである。

2 超意味に至る議論

フランクルは複数のテキストにおいて、内在的世界から超意味へと移行行く様について論述している。それぞれが議論されることになる文脈や、そこで展開される内容に異なる点はあるものの、いずれにおいても基本的に (a) 問いの始まり、(b) 問いの限界、(c) 二つの可能性と決断という筋立てで話題が展開されていく。

まず (a) から見ていこう。フランクルは内在的な意味の成立について述べた後、「意味ということを根源的に問う」(Frankl, 1946, S.62 [1994, 111頁])という視点を提示する。その問いには三つのパターンがあり、一つは運命が問題となると、もう一つは世界全体の意味を扱おうとすると、最後はなぜ人間は意味を意志するようにできているのかを問うときである。

この三つは異なる事柄であるが、それでも超意味への問いの導入とされるのは、いずれもが、内在的世界において成立する意味的關係の外側に立ち、意味的關係そのものの意味を問うことになるからであると思われる。

まず運命だが、それは「私たちが影響を与えることのできないもの、本質的に私たちの意志の力の及ばないもののこと」(Frankl, 1946, S.63 [1994, 111頁])とされており、そうしたものに翻弄されるとき、われわれは内在的世界からの問いかけを認識できないまま、自らの存在の、あるいはこの世界のありようの意味を問うことになる。また、世界全体の意味を問う場合も、人間が意味を意志するようにできているということの意味を問う場合にも、今まさに問いかけてられているという意味の体験の意味を、外側から問う構造になっている。

ここで (b) の、問いの限界に突き当たることになる。というのも、意味的關係が成立しているこの世界の、その全体の意味を問おうとしても、それを問

うことはできなくなってくるからである。

世界の全体が意味を持つとしたら、世界の全体と関係を持つ、他のものがないければならない。しかし、我々が認識できるものの総体が世界の全体であるのだから、世界の果て、世界と世界の外側の境界線に到達することはできず、ましてやその外側を認識することもできない。フランクはこのことを「全体はそれこそ見渡すことができず、そのために、全体の意味は私たちの把握能力を必然的に超えている」(Frankl, 1996, S.200 [2004, 113頁])と表現している。したがって、原理的に人間は世界全体の意味を認識することはできないということになる。

この、思考の限界に直面したとき、人間は態度決定を迫られるのだとフランクは考える。つまり(c)の、二つの可能性と決断の問題である。世界全体の意味についての問いは、人間の思考の限界を超えている。したがって、これを論理的に決定することはできない。そうした中でさらに問いを発するならば、それはどのように信じて生きるかという態度決定、決断の問題になる。そこでありうる可能性は二つであり、一つは「すべてはまったく無意味だ」というもの、もう一つは「意味の全体がもはや捉えきれないほど、『世界は超意味を持つ』としかいえないほど意味があるのだ」(Frankl, 1946, S.63 [1994, 112頁])というものである。

ここで下される決断には、論理的な根拠がない。しかしそれでも「究極の意味、存在の超意味を信じようと決断すると、その創造的な結果があらわれてくる」とフランクは述べる。というのも、そのように信じるということは、単に二つあるうちの一つの可能性を選ぶということにとどまらず、「たんに考え方の可能性にすぎないものを実現すること」(Frankl, 1946, S.64 [1994, 113頁])になるからだと述べられる。

3 苦悩と決断

さて、ここで生じる疑問は、論理的に説明ができる範囲を超えた事柄について何かを想定すれば、それは誤謬となるのではないか、というものである。世

界全体についての意味を問うこと自体がカテゴリーミステイクを犯しているのであり、したがって、それに意味があるとかないとかと問うこと自体がそもそもナンセンスなのではないかということである。

おそらく、フランクも論理的にはこのように理解していると思われる。もし論理的理解に留まるならば、それ以上のことを問うこと、そもそもこうした問いを発することの意味のなさに気づき、そこでそうした問いは解消することになるだろう。

あるいは、思考の限界に直面するとき、そこに神秘を感じ、ただそこに留まるという道もあるかもしれない。フランク自身も、哲学者はこうした事態に直面するとき、古来、それを「驚き」として表現してきたと述べている。「あらゆる哲学者が直面している本来的な驚きとは、自分自身の実存という神秘であり現現象なのです。哲学者として私は、私が存在すること、私が私であることに驚くのです。」(Frankl, 1996, S.200 [2004, 113頁])。原理的に自己の理解を超えた事柄に直面した際に生じるのがこの驚きであるならば、それを観照することに留まり続けるというのも、自然なことであろう。

それでもフランクがこの問いを解消させず、信じるという仕方でも乗り越えなければならないものとして扱うのは、この問いの根底に「苦悩」があるからなのではないかと考えられる。というのも、彼は苦悩が信仰を決断させると直接に述べているわけではないが、全体の意味を問うという問題を、純粋に認識の限界の問題として扱うに留まらず、自己を翻弄する運命の意味という観点から取り扱っているからである。

先に見たように、内在的世界では「創造価値」「体験価値」「態度価値」という仕方で意味的關係を形成することができるとされる。このうち創造価値、体験価値は、自己を惹きつける対象との出会いによって成立する。例えば創造価値では芸術的インスピレーションに打たれることによって、体験価値では愛すべき人格や美しい自然と出会うことによって、自己はなすべきことへと導かれる。しかし、世界内で出会う意味を感じられる対象を見失い、自己を翻弄する運命が問題となるとき、残されるのは存在することの苦悩のみとなる。

それでも内在世界において、この苦悩が意味を持つこともある。それは先に見た「態度価値」の実現によって可能となる。現在の自分に直接的に与えられているのが、創造されるべく、あるいは体験されるべく直接的に自己を惹きつける対象ではなく、運命によってもたらされる苦悩でしかないときにも、この苦悩を捧げるべき対象が世界内に見出されるならば、現在の苦悩に耐えることは態度価値を持つことになる。「意味に満ちた苦悩とは、勝れて犠牲なのです。」(Frankl, 1996, S.209 [2004, 137頁])

先に態度価値は、創造的価値、体験価値に比して、道徳的な高みという点でそれらを凌ぐものとしてフランクに位置付けられているということに言及したが、その背後には、彼独自の人間における苦悩の理解がある。彼は「苦悩には形而上学的重要性」があり、「人間に、ものごとを見抜く力を与え、世界を見通せるようにします。存在は透き通ってきて、形而上学的な次元が見えてくるのです」(Frankl, 1996, S.208 [2004, 132頁])と述べるが、そこで見えてくるものは、人間の本質であるとされる。

深淵の前に立って、人間は深みに見入ります。そのとき人間が深淵の底に見て取るもの、それは現存在の悲劇的構造です。そこで人間に開示されるものは、人間存在が最深かつ最終的に受苦であるということ、人間の本質は苦悩する人間、苦悩人 (homo patiens) であるということです。苦悩する人間がこの開示を体験するのは、善悪や美醜の彼岸においてです。人間はそれを非感傷的に、感傷も怨みもなく体験するのです。真理の単純かつ純粋な直感が生じるのです。苦悩する人間は、まさに真理のすぐ近くにいたのであり、たやすく真理に気づくのです。(Frankl, 1996, S.208 [2004, 133頁])

「人間存在が最深かつ最終的に受苦である」ということの意味について、二つの解釈が可能であるように思われる。一つは、人間の苦悩の不可避性のことを指しているとする解釈である。たとえどれほど創造的価値、体験価値の対象を見出すことができたとしても、それらが例えば強制収容所のような運命に

よって理不尽に蹂躪され、剥奪されるという可能性はなくなるし²、そうしたことが起こらなかったとしても、いずれ人間は死んでしまうからである。もう一つは、苦悩の只中であって意味を見出すことこそが、人間の本質に叶っている、という解釈である。創造価値や体験価値の実現の場合、外的条件によって制限されることがあるが、態度価値においてはその実現の可能性がなくなることはない。つまり無条件に人間存在に、価値を実現しうる可能性として蔵されているのが態度価値なのである。人間は存在する限り、苦悩から無限に価値を実現することができる。苦悩を、何をおいても避けるべきもととせず、このように受け入れることができるならば、「善悪や美醜の彼岸において」「感傷も^{サンチマン}ルサンチマン^{ルサンチマン}怨みもなく」人間存在は「苦悩人」であるという理解が生じるだろう。

さて、先に確認したように、態度価値は、自己の苦悩を捧げるべき対象が世界内に見出されるときに実現されるが、そうした対象が内在的世界に見出せない時にも、それを有意味なものとして捉えうる可能性にフランクフルトは言及する。態度価値がいわば水平方向にある内在的世界に自己の苦悩を捧げる対象を見出すのに対して、いわば垂直方向にある超越の世界に対象を見出す可能性である。

たしかに、さきほど確認したように、生きる意味は、すくなくらず、外面的な運命に対してどのような態度をとるか、もはや運命を形成することができないとき、またははじめから変えられないとき、どうふるまうかにこそあります。とはいっても、ここでさらに問題にしなければならないことがあります。この正真正銘の運命それ自体に、そしてその運命だけではなく、さらにこの世界の出来事全体に意味があるとは考えられないでしょうか。(Frankl, 1946, S.29 [1994, 111頁])

² フランクフルトは、強制収容所で自分の本の原稿（後に“Ärztliche Seelsorge”として出版される）を失っている。また彼が収容所から解放された後にも生き残っていた家族は、オーストラリアに亡命していた妹だけであり、父、母、兄、妻はゲットーや強制収容所で亡くなってしまっている。

もし自分の苦悩を捧げるべき対象が内在的世界に見出せなければ、苦悩のたうち回る自己だけが存在することになる。フランクは強制収容所で徹底的に翻弄された人々が発した問いを次のように表現している。「こんなふうに苦しむこと、いや、こんなふうに死んでいくことに意味があるのだろうか」。(Frankl, 1991, S.91 [2002, 134頁]) だが、こうした苦悩を捧げる対象が内在的世界を超えた超越的世界のものとなるとき、内在的世界の条件に一切左右されずに、苦悩しているということがそのまま意味を帯びることになる。ただし、苦悩を捧げる超越的な対象は、超越的であるがゆえに、その存在があるともないとも判断することはできない。したがってここでなされる決断は、論理的根拠なしになされることになる。苦悩を捧げるべき超越者の存在を、論理的根拠なしに信じるということは、何の支えもなしになされる実存的決断なのだとされる。

まったくの無意味か、すべてが有意義かという決断は、論理的に考えると、根拠がない決断です。その決断には根拠はなにもありません。言い換えると、根拠が何もないということが、決断の根拠になるのです。この決断を下すとき、私たちは、無の深淵にさしかけられて宙吊りになっています。けれども、この決断を下すと同時に、私たちは超意味の地平にいます。人間は、もう論理的な法則からこの決断を下すことができません。ただ自分自身の存在の深みから、その決断を下すことができるのです。(Frankl, 1946, S.63-4 [1994, 112-3頁])

この決断が苦悩から発するのだと解釈されるなら、世界全体が意味を持つ可能性を信じて生きるということを単なるカテゴリーミステイクだという理由で却下することはできないだろう。それは真偽が確認できないということを承知の上で、自らの存在の苦悩をどのように生きるのかという決断を意味するからである。

4 <<関係し得ないもの>>への自己の関係性

ただし、論理的には超越との関係というのは、矛盾を孕んでいる。実存的決断によって成立する超越者との関係をフランクルは「本来的には、<<関係し得ないもの>>への自己の関係性」(Frankl, 1991, S.74 [2002, 106頁])と逆説的に表現する。人間と超越者とのこの逆説的な関係は、人生の意味への問いに即しては、音響測深を例に次のように述べられる。

人間が超越者に向かって問いを発する場合、答えが超越者から人間へ戻ってくることはない。フランクルは、船から発せられた音波が海底にぶつかって戻ってきた反響を利用して海底の深さを測定する音響測深を比喻として、「存在の究極の根底に関する問いはすべて、存在の無限なる海では、なんの反響も戻ってこない」(Frankl, 1991, S.69 [2002, 99頁])と述べる。というのもそこで答えが返ってくるようであるならば、人間が問いかけたのは無限なるものではなく有限なものであり、有限な世界を超越するものとしての超越者が、有限的に立てられてしまっているという点で、誤謬に陥っていることになってしまうからであろう。人間の問いが正しく超越者に向けられているときは、答えは返ってこないのである。

だが、反響が返ってこないというだけでは、超越者が存在しているということの証左にはならない。超越者が不在であっても反響は返ってこないであろう。判断できるのは、反響が返ってきたときには誤謬に陥っているということだけであり、問いかけに対する答えがないという事実だけで、超越者と関係を形成できているかどうかは判明しない。では、答えを返してこない超越者との関係というものを、フランクルはどのように理解しているのだろうか。

絶対的なものそれ自体は、超越の中にとどまっています。少なくともそれは、発見されたものとして<<与えられている>>のではありません。そうではなく、それは求められるものとして与えられているのです。(Frankl, 1991, S.70 [2002, 100頁])

人間と超越者との逆説的關係は、人間が超越者を求めることによって形成されるのだとフランクルは説明する。このことを人生の意味に関する問いに即して考えるならば、どうなるだろうか。超越者を直接的に体験することのできない人間にも、苦悩は確かに与えられている。この確実に与えられている苦悩そのものを「問いかけ」として受け止めるならば、その問いかけを発するものが間接的に与えられることになるだろう。つまり人間が苦悩そのものを問いかけと信じて生きることを決断ならば、苦悩はそのまま「委託」となり、と同時に委託者としての超越者が体験されることになるということである。したがって、この苦悩そのものを委託されたものだとし、そのように生きる決断をすることが、人間と超越者の逆説的關係を形成することになるのであろう。

おわりに

以上、フランクルの思想において、世界全体の意味の問題が認識の限界の問題に留められず、信仰の問題として扱われるのは、強制収容所で体験した限界状況における苦悩が一つの要素になっているのではないかと、という仮説を立て、そうした観点から整合的にフランクルのテキストを読解することができるかを検証してきた。

そこから見てきたのは、フランクルの実存的決断としての超意味への信仰は、世界全体の意味を問うことの無意味さの自覚と、血を吐くような苦悩という、二つの要素の緊張関係によって支えられているということである。ここには苦悩そのものの意味への問いを基点にして、超越者の超越性を保持しつつ関係を形成するという、フランクル独特の姿勢が見て取れるように思われる。

出典

Frankl, V.E., *…trotzdem ja zum Leben sagen, drei Vorträge*, Franz Deuticke, Wien, 1946.

〔山田邦男他訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社、1994。〕

Frankl, V.E., *Der Wille zum Sinn, Ausgewählte Vorträge über Logotherapie*, Piper, 1991.

〔山田邦男監訳『意味への意志』春秋社、2002。〕

Frankl, V.E., *Der leidende Mensch, Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*, Zweite Auflag, Verlag Hans Huber, 1996. [山田邦男他訳『制約されざる人間』春秋社、2000。]

Frankl, V.E., *Der leidende Mensch, Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*, Zweite Auflag, Verlag Hans Huber, 1996. [山田邦男他訳『苦悩する人間』春秋社、2004。]

Frankl, V.E., *The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy*, Expanded Edition, A Meridian Book, New York, 1988. [広岡義之訳『絶望から希望を導くためにーロゴセラピーの思想と実践』青土社、2015。]

Frankl, V.E., *Ärztliche Seelsorge, Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse*, Deutscher Taschenbuch Verlag, 2007. [山田邦男監訳『人間とは何か-実存的な精神療法』春秋社、2011。]

付記

1990年に千葉先生が北海道大学に着任されたとき、私は新入生として、先生が担任されるクラスに配属されました。

入学のオリエンテーションで初めてお目にかかった先生は「学問をするために大学に来た人はいるか」と明るく元気に新入生たちに問いかけておられました。高校までとは異なる学びを求めている私には、学問にも学生にも真摯に向き合っておられる、とても魅力的な先生に映りました。

それ以来、在学期間中の数年間、学部の授業はもちろんのこと、私的に開いていた読書会、オフィスアワー、学生を招いて開催して下さるご自宅での食事会など、色々な機会に友人と、あるいはまた一人で千葉先生のところへ足を運び続けました。

大学時代の私は自分を持て余し、どのように生きていったら良いのか分からず、鬱々とした日々を過ごしていたのですが、先生に苦しい心持ちをとりとめのない言葉で打ち明けると「ニヒリズムに陥っているねえ。でも大丈夫、君なら10年で抜けられるよ」と話して下さりました。このときにかけていただいた言葉は、なぜ苦しいのかさえよくわかっていない私の状況に、形と希望を与えてくださるものでした。

学部を卒業し、いよいよ北海道を離れることが決まると、個人的にご自宅でのお食事に招いていただきました。夜になり、まだ雪の残る駅前まで送ってくださった千葉先生が「お元気で」と手を差し出し握手をしてくださったそのとき、私と世界との間を隔てていた何ものかが消え去り、視界が明瞭になるという体験をいたしました。帰途、一人で見上げた曇天の夜空はこの上なく美しく、汽車に居合わせた、見知らぬ人々は圧倒的な存在感を放っていました。そのときには何が起こったのかわからなかったものの、私がニヒリズムから抜け出すきっかけの一つとなったこの出来事は、今にして思えば人格から人格への語りかけというものの、ありありとした体験だったのだと思います。

千葉先生との出会いがなければ、人生を投げ出さずに生き続けることも、苦しみのうちにある学生に真剣に向き合いたいという思いを抱き続けることもなかったかもしれません。ここに心よりの感謝を申し上げたいと思います。